

ル、主催むさしの琵琶研究会(千円)。筑後川一佐藤旭尚、仁科信盛、本橋錦、山科の別、坂入俊風、彰義隊、青木早水、鉢の木、若林鶴山、坂崎出羽守、理事長加藤錦陽、紅葉狩、広瀬翠紅、耳なし芳一、木原錦秀、高松城、高田登水、都落ち、押川旭葉、大物の浦、若宮旭登、俊寛、若水桜松。

日本琵琶楽協会定例研究会

十二月十一日(日)一時東京豊島区高三会館(五百円)。形見の桜、池野谷吟、大高原吾、斎藤俊玲、白虎隊、小沢錦、南部坂、藤巻旭、講評、吉川英史、こまサワリ、話、鈴木流泉。

各流派合同琵琶演奏会

十二月十一日(日)正午京都東山安比羅宮会館、京都琵琶協会、一水会、京都支部共催。師走には珍しく暖かい好天で開会前、ファンが詰めかけ程なく超満員となり会場は整理に忙殺され、五時十五分の終演まで殆ど席を立つ人もなく成功を収めた。そのあと乾盃に続いて忘年宴会に移り七時目出度散会。尚一水会大阪支部長小川吟水が来会され臨時出演を願って錦上花を添えた。船弁慶、野田水、乃木将軍、多賀帯水、大楠公、櫻井旭、本能寺、田中敷水、南部坂、山岡旭清、坂崎出羽守、木下皇水、葉見、早川幾水、田村邸、田中鶴水、石重丸、植村真水、山内一、豊、荒木旭媛、栗津ケ原、矢吹旭美津、鉢の木、小川吟水、別れの盃、馬場鴨水、仏御前、梅原旭濤、西郷隆盛、牧南水、上杉謙信、平井春嶺。

ラヂオ・テレビ琵琶放送

○：十一月六日(日)晚十時二十分NHK・FM

ラヂオ。現代の音楽「絃声無限」「琵琶行」全部口語体で琵琶鶴田錦史、半田綾子両女史の外、三、三絃、二、歌二、十七絃、尺八、笙、りう笛、篳篥、打楽器各一の合奏。  
○：十一月九日(日)晚八時NHK教育テレビ「邦楽まわり舞台」「川中島懐古」平山真佐子女史。外に秋江節の舞踊二題。

○：十一月十六日(日)同右、「神威岬」内山鶴崇氏。外に地唄舞、箏曲等。

○：十一月二十四日(日)休三時NHK・FMラヂオ「小栗栖」藤巻旭、長柄の秋風、原島旭、藤原氏。

○：十二月八日(日)同右、「大高原吾」木原綾子、「雪晴れ」中谷襄水両氏。

○：十二月八日(日)休七時毎日テレビ、小川吟水氏とフランメンコギター、西村寛治氏の合奏「巖流島」の一場面を放映。

三田村錦霞(隆司)氏 十一月二十二日逝去、享年六十三。薩摩筑前琵琶の製作者としても貴重な人であった。謹んで御冥福を祈る。田中旭嶺(弥生)女史 十一月二十八日すい臓がんのため逝去、享年七十一。五才で豊田旭穂師入門、戦前アメリカに演奏旅行をするなど筑前琵琶の大御所的存在であった。謹んで御冥福を祈る。

予告

○：京都琵琶協会一月定例茶話会 一月十六日(振替休日)午後二時京都西大路駅前レストラン「京みやこ」。夕刻から総会、新年宴会、全員万障繰合せ出席のこと。  
○：新春名流演奏会 一月二十八日(出十一時

東京銀座ガスホール。主催日本琵琶楽協会。○：新春晴風演奏会 一月二十九日(日)一時東京杉並区高円寺会館。会主浅野晴風氏。  
○：第一回各流派名流演奏会 三月十、十一両日京都烏丸御池京都商工会議所ホール。主催日本琵琶楽協会関西支部。

昭和五十三年の新年を迎え自度なく御越年の各位の御健勝を謹んでお祝い申し上げます。どうぞ本年も旧に倍して御垂教御鞭撻のほど懇願いたします。本来ならばこの御挨拶は巻頭の辞として申し上げべきなものですが型に嵌った堅苦しい字句を並べたのもどうかと思ひ殊更遠慮致しました。琵琶も年と共に発展し各地演奏会等も頻りに催され、ラヂオ・テレビで取上げられる回数も最近では宣伝の効果を挙げる結果を招いているのは喜ばしい限りで世間が琵琶の良さを改めて認識し出した証と考えられます。琵琶が琴や三絃尺八等との合奏に意を注ぎ特に洋楽器との共演に熱意を燃やす人が出はじめたのは結構なことでは等について研究を重ねる方々に対しては深甚の敬意を表するものであります。本年も益々奮励御活躍下さって事あるごとに一人でも多く琵琶楽に共鳴する人を獲得するより努力したいと存じます。宣教御願ひ申し上げます。

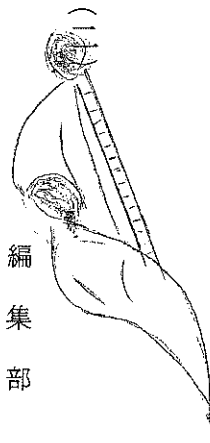
昭和五十三年一月一日発行(非売品)  
編集者 植村真水  
発行所 高槻市津之江北町一ノ二番  
電話 〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶

京 絃

第二八三号 京 絃 社

西郷隆盛の魅力語る



編集部

反对者も共感

(司馬) 反革命主義者でも西郷に共感するところがある。西郷は近代の条件のひとつとされた工業というものがどうも理解できなかった。島津斉彬の弟子という気分であったが、斉彬の持つ産業革命はなかった。いわば農本的理想主義が西郷の政事的な基礎になっていた。サトウから見れば、そのベイスに立った多少の近代化はいいのだが、にわかには舞台装置をガラリと入れ替えて、何もかも新築のセットでいくのだという大久保方式を疑問視する考えはあったのだろう。つまり西郷の方が人間の暮らしと社会をはるかに知っているのだ、ということだ。

(萩原) 大まかにいうと、明治維新とは良かったのか悪かったのかという問題がある。そこへ西郷が出てくるような気がしてならない。サトウには、日本が近代化するスピードに対する疑問と恐れがあった。自分たちが取

り残されるのではないかと、大久保に代表されるいき方に対する疑問と同時に、驚き、恐れたいなもの。それまでは自分たちがコピーしてやるという気持ちだったのが、どんどん先へ突っ走る。もうコピーはお払い箱になるんじゃないか。サトウが友人にあてた手紙の中でも、外国人は黙って退場するのみ、と書いてある。サトウの親友ウイリアム・ウイリスがドイツ医学を採用した東京医科大学を追われて鹿児島に行くというのも、読み込みがきつすぎるかも知れないが、当時、明治国家がとりつめた方向からはじき出されたというのではないか。

(萩原) イギリス人からみた西郷は、徳川という階級社会が生んだ紳士のひとりだった。

明治以後はあれ程大きく階級社会から離脱していくが、そのときに感ずる不安もサトウにはあったのではないか。  
(司馬) それはある。階級があつて安定があるという考えはイギリス人が公理みたいに持ってきたものだ。そこにイギリス紳士のような好ましい男性、つまり自律心と節制と美学を持った西郷が出て来た。

大久保と対比

(萩原) いまとなって西郷の中にいろんなことを読み込むことはできる。西郷自身は何も書いていないから。

(司馬) そう、それが西郷の一大欠点だ。美德といえどそれもそうだが、西郷について薩摩藩における若衆頭として存在したというイメージがある。現実には履歴の中でも二十三、四までは鍛冶屋町の郷中の若衆頭をしている。京都で非合法的な活動をしていくとき、国元から若い者がやってくるにつかみ金で金をやる。若いころは金がある。遊びにいけてかわいがる。ただし、その連中が少しづつが立って出世慾や権力慾が出たり、理屈っぽくなったりするといやになる。一番きらいなのは東京にいる出世主義者だった。辞職して国に帰ってからもどんどん帰ってくる若衆たちをかわいがった。その若衆たちから戦争をしようといわれれば若衆頭としてはノーとはいえない。そのなかに土俗の論理といったものもあつた。

(萩原) そういう西郷像はひとつには何かに人間の温かさだろう。当時のイギリス人の頭にあつたのは大久保と西郷との対比だったから人間の温かさは西郷に感じただろうな。

(司馬) サトウの回顧録のなかで西郷に神戸沖の船中で初めて会う文章は感動的だ。それから西郷についての評で終始反対に回った太政官側の黒田清隆が、西郷が城山で死んだことをきいたとき、征韓論に反対してあれだけ奔走していたながら、惜しき仁者をなくしたといっている。同郷人からみていて面白い。本質は仁者なのかな。

(萩原) そうかも知れない。有名な話だが、明治十年三月、サトウが鹿児島から東京に帰って来て最初に会いたくて会うのは勝だが二人で大久保の悪口をいっている。サトウは冷静な観察者で、割合慎重な男でもあまりくわしく自分の感想を書いていないことが多いのに、盛んに大久保の悪口を書いているところなど明らかに西郷への共感がある。

(続く)



続・私の音楽ノート(二)

水藤 五郎

名人と迷人

芸の道に志しを抱く人のすべてが名人の夢を持つのであります。それは、政治家が

総理大臣の席を夢見ると同様であり、相撲界での横綱でもあります。

その夢を如何に持続させて、現実化してゆかが芸術家に於ける名人への道そのものであります。あくまでもあきらめずに努力することが第一の条件なのであります。一つの道が栄える為には、偉人の出現が不可欠であるのですから、名人の生まれることが芸の道では第一条件となるわけです。

しかし、名人が生まれる為にはそれ相應の状況があるように思えます。つまり、名人とは、一個人の努力のみでは生まれないと云うことでもあります。それはあたかも、良い料理を食べる為には、新鮮な材料と、技量の高い調理人、調理器具、食事の場所、その他数え切れない要件が満たされることが前提とされるのです。名人と云われる人が、如何に個人の努力で技量を向上させても、それは上手の域で止まってしまうことになりません。

「名人は上手の坂を一登り」の格言はここに根ざしていると思えます。上手になる為には努力の限りをつくしている中に、なんとかいつける様です。ところが、名人はこゝに社会的命運が加わることに依って生まれるのです。中国の政治哲学、特に、古代君主論はこれを強調しています。即ち、覇主となる為には天運が定まらなければ絶対にならないと云う論です。朝に貧民の様相をしていても、その人物に帝の運が下っていると説く占易の話があります。名人と云う芸道の覇者にもこれ

はあてはまるようです。

勿論、名人の天運が努力に優先するとは思いませんが、さりとて、天運が名人達成の条件度として低いパーセントであるとは思えません。むしろ高いとしても良いのでは……。

多くの名人を見て共通することは、四十才代の時には、己に名人の評が下っていることです。花伝書で、世阿弥は、「三十五、六十の能は技量的に最高に充実していること」と説いています。世間の人から、あの人は上手だ、実力者だ、と、三十代後半に於いては評価を受ける技量を持っている可きだとのことですが、人生五十年の中世思想からすれば、当然、そうでありましょう。さすれば、四十代の後半になった人が名人の評を受けても不思議ではないのです。

永田錦心が四十代に於いて名人の評を受け、三遊亭円朝も四十代で名人と評されています。大和楽の作曲で知られた、清元栄寿郎師が亡くなったのが五十二才、やはり名人との評を受けていました。つまり、芸を志す者、四十才を過ぎたら、自分が死んだら、名人と称されるかどうかを考えてみなければならぬわけですね。「芸の世界では四十、五十は鼻たれ小僧」と云う言葉がありますが、あれは七十才以上の人々を尊敬する為の外交格言である様です。

十人の人々が居て、その中の一人から、あの人は名人だったと追慕される芸になっていくことが四十代の芸の条件であります。そ

して日々、十人の中の残りの九人総てを納得させるべく努力してゆく、五十代の後半、六十才になる前には、全ての人々が、名人だった。あの人はと追慕したり、讃辞したりする芸になっていく。これが多くの名人に見られることでした。名人とは決して六十代、七十代の専売特許の称名でなく、むしろ、それ以前にならなければならない境地なのです。

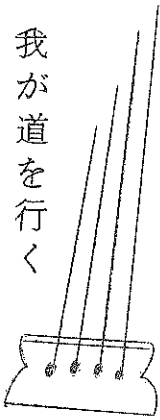
勿論、この理論は、六才から始めた人が、四十年くらい稽古精進して得る境地ですから二十代から始めれば六十代がこの境地なのです。しかし、これは数学の計算であって、実際には、何才から始めても、四十代、五十代の二十年間が勝負であって、反面、死との対決でもあるのです。四十代で死した錦心師が名人と称せられ、師の琵琶修業は十代の後半からであったと解せられるのですから、前述した如くであります。

芸術家の評価は死期まで決定し得ないので、如何に讃辞されても、それは虚像であります。名人となる天運が下ったのか、下るのか、又、下らないのかは誰にも判らないのです。そして、それが下らなかつた多くの人は、「好きこそもの上手なれ」との格言を奉じて、芸に志を傾けます。そして名人への夢をすてぬまにいます。何故なら、大変良かったですと褒められたり、名人と云う声がかかると、やはりうれしい心が満ち上がってくるからです。

この意味では、全てが悟りのない迷人なの

であります。近時、多くの名人を失なつた斯界では、新名人を生み出す状況をつくり出す力もなく、さりとて、名人をあきらめざる悟りもなく、迷人の往來のはげしい日々であります。

長い間の御愛読厚く御礼申し上げます。暫時、休筆させて頂いて、勉強いたしたく思います。よろしく御鞭撻下さいますよう。(完)



我が道を行く

六十五年(五五)

西郷 天風

その翌月は海水浴の最盛期で、賑やかな大貫海岸をなぎさ伝いに大洗方面へ遊歩の途上、数人の浴客が、常陸丸の生き残りかどうかのこのと、我々琵琶人には聞き流し出来ぬ講演会が何処かあるらしいので、昼食もそこそこ道を通り通りに出てみれば、果たせるかな、常陸丸の生存者野中某(野崎?)の遭難実況講演会が附近の劇場で、一時から催されると云うポスターを発見し、そのまま会場に走れば、広くもない劇場内は深閑として、せいぜい五、六十名の聴衆というのも意外だった。

しかし、そうした中で語る実戦談は、戦争

というどうにもならぬ断末魔を彷彿する負傷兵の惨状や、砲弾炸裂に吹き飛ばされ、濃霧の中で波浪と戦いながら無言のまま命の綱を奪い合う有様など、目前に彷彿せしめる話術は相当なものだった。

私は、次ぎの平磯座、その次ぎの磯崎座と三日間を入場者数や如何にと追尾して見れば何処も五十人足らずで、一般人の常陸丸に対する無関心さに義憤を覚え、早速楽屋で野中氏と対談の末、翌九月末水戸市常磐座に於て常陸丸追憶講演琵琶大会を催した。その結果は大盛會裡に終了、大好評を博して漸やく溜飲を下げた次第だった。

因みにこの野中氏は、当時上野寛永寺墓地附近の高台に住んでおり、広い座敷に廊下をめぐらし、日暮里方面を見下す料亭風の家庭で、庭の片隅には、常陸丸記念碑用台石が積み重ねてあった。その様子は今でもまぶたに見ることが出来る。

尚、この催しは我が国風会の主催ながら臨時の会なので、出演者もガラリと変え、まづ女流界に評判の水越声操女史(当時関西で名をなした足立光師の高弟)をはじめ、錦心流の山口速水、中谷若水(現在は山野愛子美容学園長)の両故友らで、水戸としては珍しい顔ぶれであり、野中氏の講演に興を添えたのであった。

さて、その頃からだった。我が大日本琵琶国風会の定期大会に対する一般人の期待は一段と高まり、やがて県立高等女学校をはじめ

私立高女、或いは市の内外にある裁縫女学校などの寄宿生たちが、教員引卒のもとに入場を申込み来て、県公会堂の二階機敷は前日に既に予約満員となるのが例となるに至った。それは兎も角、水戸近郊内原駅の奥に開校された国民高等学校でも、年に数回琵琶を欣賞するのが例となり、創立者加藤寛治校長自らハイヤーで迎えに来るのであった。

この学校は農事専門の特殊学校で、全国から馳せ参ずる青年男女は卒業後、満洲国内の大農園に入居が約束されている優秀な若人たちで、琵琶への造詣も深く最も楽しい処だった。

斯様に、琵琶が県下を横行する勢いに乗じ、水戸市内外に多くの顧客を有つレコード商の一人が、関西のレコード会社と交渉の末「常陸丸」と「城山」の二曲を音盤にしたいと要請があり、はるばる水戸から大阪まで出かけたのが昭和八年の夏も暑い最中だった。

レコード会社は鶴印と貝印の二社で、どちらか一方はマイクローフォンを備えていたが、片方は厚いボール紙製ラップを、顔の前と琵琶の撓面に向けた二個を目標に座して、歌う際に干高い所は口をラップより少々遠ざけるなど、中々神経をつかいながらの吹込みで、自信がないまま一度も聴いたことがないとは、ウソのような本当のことである。

ところでその翌年、つまり昭和九年の或る日、神戸の知らぬ人から琵琶についての招聘状が届いたが、この事については稿をあらためて述べることにする。

年代は少々あと戻りするが、前の内大臣田中光顕伯は、勤皇の地で知られた水戸の郊外大洗海岸で、磯前神社のある東光台に東京の明治記念館と同じ 明治大帝御乗馬の英姿豊かな御銅像を奉安して、東光台明治記念館を建立、その側に護国堂を建て、日蓮宗を奉ずる井上日召和尚を堂守に任じた。

キリスト教をはじめあらゆる宗教を極めたが意を充たすに至らず、漸やく日蓮宗に落ちついたという日召和尚は、忽ち有為の青年数名を得て、毎年東光台夏季講習会を開き、その都度私は芸術部門の一員として、日蓮関係の歌は云わずもがな、好んで「迷語もどき」「蜘蛛」「老蘇の森」等を弾奏してお茶をにごしていたが、やがて全国各地に澎湃として起った愛国陣営の志士たちと交遊の道が開かれたのも、自然の成り行きだった。

忘れもせぬ昭和六年の夏、久しぶりで東光台の護国堂から講習会の案内が届いた。前年上京した日召和尚の一行が、海水浴かたがた休養のため古巣に帰ったのを、別に変わった様子はなかったものを、それから半年後の昭和七年二月九日、続いて三月五日の両日、いづれもかつて東光台の夏季講習会の期間中寝食を共にした小沼、菱沼両氏のテロリスト的行動による血盟団事件が、突如として天下の耳目を震撼し動乱時代を予告した。



無形文化財 肥後琵琶 旭城

明けましておめでとうございます。京紋社長植村真水師をはじめ本誌御愛読の諸先生方、お揃いで新しい年をお迎えのことと存じ、心からおよろび申し上げます。未熟な文章に、おしかりも受けずに一ケ年を終りました。今年も元氣一杯で頑張りますので、旧年に倍してご高導のほどをお願い申し上げます。(昭和五十三年元旦)

熊本市は古い街である。大化改新時代(六四五)国造を廃して、諸国に国司を置いた。その後足利時代末期、菊池の一族出田築後守秀信が、始めて熊本に城を築いた。その頃は府中と称し小城であったが、天正時代から次第に繁栄の城下町となり、更に加藤清正が肥後の大守となってから、古府、中の寺院商家などを熊本城下に移し、慶長六年(一六〇一)城を改築して大いに栄えた。

この城下町に、古い肥後琵琶が数年前、国の文化財に指定された。

しかし、肥後琵琶のみか、一時全盛を極めた薩摩、筑前琵琶も今は新音楽芸能に押され

て影が薄くなり、敗戦後は耳にすることも少なく、特に肥後琵琶は、琵琶そのものも市の博物館にでも行かぬ見事も出来ないほどである。

文化財指定と云っても人間国宝とは違つて、年金を贈ったりするものではなく、琵琶の記録を留め、録音その他後継者の育成まで保存確保の措置が目的のようである。

九州には琵琶で経文を講じる盲僧が、古くから住みついたと伝えられる。盲僧琵琶が九州地方へ渡来した伝説によると、釈迦は愛弟子の巖尊尊者の盲目を憐れんで、琵琶を弾じて「地神陀羅尼經」と「荒神の法」をおさめるところを教えられた。

その後印度のアシヨカ王の子グナラ太子が、継母のため盲目にされたので、巖尊尊者の弟子となつて大いにこれを広めた。

そのころ中国に七鬼太子、阿瘦太子などの盲人がグナラ太子の弟子となつて盲僧琵琶を中国に伝えたという。しかし古文書によると、年代的に齟齬する点などから考えて、これらは単なる伝説に過ぎないようである。

今日では、ベルシャに発した琵琶が印度に渡り、更に中世に仏教文化と共に中央アジアの龜茲(きよじ)を経て、我が南北朝時代に盲僧琵琶となつて、日本の九州地方に伝来したというのが定説のようである。盲僧琵琶とは、盲人が僧侶となつて琵琶を弾じながら「地神經」を唱え、土荒神の法を修するもので、俗にいう「釜戸の神様」を意味し、農家など

の台所では今でも祭つてあるところが多い。釜戸の神様は土地を護る神であり、また人の命を預かる台所の神様でもある。お破いをして四方を淨め、地神經を誦して五穀豊饒と家内安全を祈つた、その大切な役目を勤めるのが盲僧琵琶であった。

肥後には、延宝二年(一六七四)岩船検校が、細川藩主に招聘されて中央の琵琶を伝へ、肥後に題材の語り物に節つけしたものと伝えられている。

岩船検校は、諸大名屋敷にも出入りするの命を預かる台所の神様でもある。お破いをして四方を淨め、地神經を誦して五穀豊饒と家内安全を祈つた、その大切な役目を勤めるのが盲僧琵琶であった。

清正公も熊本城完成祝いに、城下の民衆達と共に共楽のため上方から芸人を召し寄せて、城下に大興行を催し琵琶の演奏も行われた。

琵琶の形は薩摩と肥後とはよく似ている。胸が狭く、新しく改良された大巾の筑前とは対照的である。厚みは博物館にあるのは随分厚いが、盲僧が巡遊に背負うて歩くのに都合のよいように、薄くなつていゝるのも多いようである。

幕末という歴史的な大舞台に現われ出で、突如として京洛の巷に剣風を捲きおこした「近藤勇」(一八三四一六八)以下の「新撰組」その興亡はまったく目まぐるしいものがあったが、中でも元治元年(一八六四)六月五日夜半の「池田屋事変」のごときは文字通りのクライマックス・シーンであり、これがため、明治維新が一年遅れたなどと云われている。そしてこの襲撃で久坂玄瑞、高杉晋作と並んでの吉田松陰門下の三秀・吉田稔麿などを失った長州藩では、悲憤と激怒の頂点に達し、ただちに諸隊を組んで京へ向けての進発とはなつた。

「新撰組始末記」

郡 恵 一



かくして七月十八日夜一長藩・国司信濃の指揮する一隊が京の中立売御門に火蓋を切つ

謹賀新年			
<p>〒621 京都琵琶協会 一水会京都支部 木村維水 電話〇七七二(三三)〇五六四番</p>	<p>〒604 錦心流琵琶 牧南水 電話〇七五(八四二)二九八九番</p>	<p>〒164 薩摩琵琶 仲川秀邦 (旭朋) 電話〇七五(七七一)四〇一六番</p>	<p>〒806 筑前琵琶橋会 法香久院 荒木旭媛 電話〇七五(七七二)四〇一六番</p>
<p>〒604 薩摩琵琶高昇流家元 泉勝院峰口高昇 電話〇七五(二二二)〇八九番</p>	<p>〒520 大津市中中央一丁目一番十号 電話〇七七五(二四)五〇二七番</p>	<p>〒523 錦心流琵琶教授 野田彩水 電話〇七四八三(二二)〇五四七番</p>	<p>〒011 錦心流一水会秋田支部 星野崖水 電話〇一八八(四六)三三三九番</p>
<p>一水会神戸支部 事務所 〒662 西宮市羽衣町七ノ三四 電話〇七九(三三)五八八七番</p> <p>伊馬場正陽 吹場正陽 戸倉旭美 若田倉田 植村中宮 梅田原村 野吹田 矢住旭 安本旭 山本旭 山本旭 山本旭 古谷本岡 荒木谷 阪本木 木村本 木下村 桜井内 平井口</p> <p>伊馬場正陽 吹場正陽 戸倉旭美 若田倉田 植村中宮 梅田原村 野吹田 矢住旭 安本旭 山本旭 山本旭 山本旭 古谷本岡 荒木谷 阪本木 木村本 木下村 桜井内 平井口</p>			

謹賀新年			
<p>〒240 錦心流琵琶教授 鉦水会 平野鉦水 電話〇四六八(七三)一四ノ五三番</p>	<p>〒850 熊木鼓水 電話〇四九二(二二)四四六一番</p>	<p>〒671-20 北中旭蝶 電話〇七五(二二三)七一九五番</p>	<p>〒585 筑前琵琶 大阪中央旭会 塩谷旭洲 電話〇六(九五二)九二九四番</p>
<p>〒618 桜井旭会会長 秋元旭晨 電話〇七五(九六一)五〇八四番</p>	<p>〒168 あさひ短歌会 翠琵琶宗家 竹下翠風 電話〇二(三〇三)五八九四番</p>	<p>〒658 琵琶を楽しむ会 一水会京都支部会友 田中欸水 電話〇七八(八五一)二六三番</p>	<p>〒183 坂本錦道 電話〇四二三(六一)五六八四番</p>
<p>京都琵琶協会 〒608 京都市北区平野宮西町六四 電話 (四六一) 一四二三番</p> <p>伊馬場正陽 吹場正陽 戸倉旭美 若田倉田 植村中宮 梅田原村 野吹田 矢住旭 安本旭 山本旭 山本旭 山本旭 古谷本岡 荒木谷 阪本木 木村本 木下村 桜井内 平井口</p> <p>伊馬場正陽 吹場正陽 戸倉旭美 若田倉田 植村中宮 梅田原村 野吹田 矢住旭 安本旭 山本旭 山本旭 山本旭 古谷本岡 荒木谷 阪本木 木村本 木下村 桜井内 平井口</p>			

# 年 新 賀 謹

〒370-12

群馬県高崎市岩鼻町局前二四七  
電話〇二七三(四六)二〇〇六番

全 朗 協 関 東 副 部 長  
テ イ チ ク レ コ ー ド 専 属  
日 本 錦 古 流 総 本 部 会 長  
宗 家 針 谷 錦 古

〒420

静岡市西草深町二十一番二十号  
電話〇五四二(五三)一四七一番

吟 詠  
琵 琶  
家 元  
赤 心 流 鶴 翁

〒544

大阪市生野区小路二ノ一六一二五  
電話〇六(七五三)〇〇三二五番  
(七五三)〇〇六六七番

高 千 穂 旭 楓

〒537

大阪市東成区神路三ノ八ノ十八  
電話〇六(九八一)二二九一四  
夜間〇六(九七三)二七七八番

東 大 阪 旭 会 会 長  
榊 本 旭 風

# 年 新 賀 謹

〒154

東京都世田谷区太子堂二丁目  
二番八号  
電話 (四一四) 六五七八番

宮 崎 直 二

〒569

高槻市津之江町二丁目十二ノ三  
電話〇七二六(七一)六五八〇番

筑 前 琵 琶 橋 会 宗 範  
山 崎 旭 萃  
大 和 流 琵 琶 吟 家 元  
山 崎 光 椽

〒651

神戸市葺合区上筒井五ノ四ノ二  
電話〇七八(二二二)一一六一番

筑 前 琵 琶 旭 堂 会  
旭 会 大 師 範  
柴 田 旭 堂  
宝 塚 花 組  
上 原 ま り  
(旭 艶)

謹賀新年	
<p>〒617 向日市西向日鶏冠井町山端 電話〇七五(九三)一六九一 二番地</p> <p>梅原旭濤</p>	<p>〒250-04 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 電話〇四六〇(二)二二二番 一三〇〇 紅葉閣</p> <p>筑前琵琶橋会 押川旭葉</p>
<p>〒790 松山市柳井町一丁目 電話 (二)二三一七番</p> <p>佐藤晃絃</p> <p>日本琵琶楽協会々員 愛媛琵琶連盟顧問</p>	<p>〒177 東京都練馬区石神井台四ノ五 電話〇三(九八二)四〇一三番 一〇ノ五〇二</p> <p>一水会武蔵野支部長 ものがたり琵琶 雅俊杉山旗水</p>
<p>〒570 守口市緑町土居団地十一号 電話〇六(九九二)五六二五番</p> <p>小川吟水</p> <p>大阪吟水会</p>	<p>〒601 京都市南区吉祥院中島町三〇ノ 電話〇七五(九六一)〇二二八番 八九</p> <p>会長 矢吹旭美津 一西富田中旭富貴水 坊寺村山旭富貴水 外門人一同</p> <p>琵琶三美会</p>

謹賀新年	
<p>〒160 東京都新宿区三栄町十六 電話 (三五)四五九一番</p> <p>日本旭会 大師範 押田旭窈</p>	<p>〒173 東京都板橋区板橋一丁目二十一 番四号 電話 (九六一)二二〇〇番</p> <p>池上作三</p>
<p>〒359 埼玉県所沢市中新井二ノ二八一 電話〇四二九(四三)〇九二八番 ノ四</p> <p>薩摩琵琶錦水会 正絃会・四明会会員 岡部錦蝶</p>	<p>〒602 京都市上京区東堀川樺木町角 電話〇七五(二)四〇三三番</p> <p>筑前琵琶旭穂会 神心流吟道本部理事 師範中島旭穂 総師中島穂風</p>
<p>〒570 守口市緑町土居団地十一号 電話〇六(九九二)五六二五番</p> <p>小川吟水</p> <p>錦心流琵琶 一水会大阪支部 会員一同</p>	<p>〒606 京都市左京区下鴨蓼倉町一六 馬場鴨水方 電話〇七五(七八一)三〇五〇番</p> <p>錦心流琵琶 一水会京都支部 会員一同</p>

# 年 新 賀 謹

〒237  
横須賀市船越町一ノ五〇  
電話 (六一) 三六七六番

山田 幻水

横須賀琵琶連盟会長

〒164  
稽古所 中野区中野二ノ二五ノ六  
電話(三八一)八九二二番  
自宅 電話(三六二)〇〇六一番

浅野 晴風  
会長

薩調晴風会

〒060-91  
札幌市中央区南六条西七丁目  
電話〇一一(五一二)七二五二番

広川 岳 楓

岳城流薩摩琵琶

〒600  
京都市下京区四条通高倉西南角  
(大丸前)  
大和銀行京都ビル8F  
電話〇七五(二三一)〇〇三二番

松本 明 重

日本民主同志会中央執行委員長  
宗教人世界救世教外事対策委員長  
京都救世会館名誉館長  
社団法人 日本郷友連盟本部理事  
法人 日本郷友連盟本部理事  
樹祇園すゑひろ代表取締役会長

# 年 新 賀 謹

〒343  
越谷市大成町一ノ二三九二  
電話〇四八九(八三)  
一二四一三番

鈴木 流 泉

日本琵琶振興会長

東京都世田谷区八幡山二ノ一ノ  
電話〇三(三二九)三五五〇番

琵琶洲 楓 会  
会長 大館 美江子

〒520  
大津市逢坂一丁目二ノ三一  
(蟬丸神社前)  
電話〇七七五(二四)九三二八番

松岡 旭 岡  
伊藤 旭 暢

謹 賀 新 年			
<p>〒369-12 埼玉県大里郡寄居町大字寄居 電話〇四八五(八一)一七四〇番 五五八</p> <p>大井 錦 淀</p>		<p>〒431-31 浜松市積志町一八三一 電話〇五三四(三四)〇八七一番</p> <p>薩摩琵琶鶴絃会 会主 小野 鶴彦</p>	
<p>〒160 東京都新宿区西新宿六三ノ三 山崎錦幽方 電話(三四二)一〇六〇番</p> <p>日本芸術琵琶 柏会々員一同</p>		<p>〒181 東京都三鷹市上連雀二ノ九ノ 一三二(四四)一四一六番 電話〇三三二(四四)一四一六番</p> <p>日本琵琶 三位研修同志会本部 伊集院 鼓城 外同志一同</p>	
<p>〒176 東京都練馬区豊玉北五ノ一一 芸友社 電話(九九一)〇三六三番</p> <p>鈴木 誉士</p>		<p>〒435 浜松市安松町三三三ノ四 電話〇五三四(六一)三五五四番</p> <p>君塚篁陵門下 正絃会・鶴絃会・四明会々員 篁流 柿沢 篁峰</p>	
<p>〒569 高槻市南総持寺町 公団住宅三〇ノ二〇四 電話〇七二六(九六)八五一六番</p> <p>吉井 良三</p>		<p>〒156 東京都世田谷区経堂三三三ノ七六 電話(四二八)七四八三番</p> <p>邦楽名絃会 琵琶 西郷 天風</p>	
<p>〒184 東京都小金井市本町一ノ八ノ五 電話〇四二三(八一)三三四四番</p> <p>伊藤 馨水</p>		<p>〒238 自宅 横須賀市富士見町三ノ一七 電話〇四六八(二二)三七七五番</p> <p>東洋音楽学会々員 邦楽木犀会相談役 史城 普門 義則</p>	
<p>〒625 舞鶴市朝日通五條東入 電話〇七七三(六四)〇五一八番</p> <p>日本旭会 舞鶴琵琶協会 事務所 高橋 旭洋</p>		<p>〒124 教室 東京都葛飾区堀切二ノ六〇ノ三 清和荘二階一五号 電話〇三(六九四)九五七九番</p> <p>日本琵琶楽協会企画部 錦心流琵琶大館派教授 平井 洲誠</p>	
<p>〒678 相生市相生三丁目一四ノ一七 電話〇七九二(二二)五一八八番</p> <p>浜本 旭好</p>		<p>〒171 東京都豊島区高松三ノ一二 電話〇三(九五五)三六四五番</p> <p>筑前琵琶旭鴻会本部会長 大師範 藤卷 旭鴻</p>	
<p>〒653 神戸市長田区梅ヶ香町一ノ二四五 電話〇七八(六七)〇〇一八番</p> <p>筑前琵琶日本旭会 田中 旭昇</p>		<p>〒184 東京都小金井市本町一ノ八ノ五 電話〇四二三(八一)三三四四番</p> <p>錦心流一水会多摩支部長 各流派琵琶武絃会事務所 伊藤 馨水</p>	

謹 賀 新 年	
<p>〒040 函館市青柳町二六ノ一四 電話(二二)八三六五番</p> <p>高橋 蘇水</p>	<p>〒171 東京都豊島区高松三ノ一二 電話〇三(九五五)三六四五番</p> <p>筑前琵琶旭鴻会本部会長 大師範 藤卷 旭鴻</p>
<p>〒238 自宅 横須賀市富士見町三ノ一七 電話〇四六八(二二)三七七五番</p> <p>東洋音楽学会々員 邦楽木犀会相談役 史城 普門 義則</p>	<p>〒359 所沢市日吉町一七ノ一三 電話〇四二九(二二)三一七五番</p> <p>日本琵琶楽協会企画部 錦心流琵琶大館派教授 平井 洲誠</p>
<p>〒184 東京都小金井市本町一ノ八ノ五 電話〇四二三(八一)三三四四番</p> <p>伊藤 馨水</p>	<p>〒678 相生市相生三丁目一四ノ一七 電話〇七九二(二二)五一八八番</p> <p>浜本 旭好</p>
<p>〒625 舞鶴市朝日通五條東入 電話〇七七三(六四)〇五一八番</p> <p>日本旭会 舞鶴琵琶協会 事務所 高橋 旭洋</p>	<p>〒653 神戸市長田区梅ヶ香町一ノ二四五 電話〇七八(六七)〇〇一八番</p> <p>筑前琵琶日本旭会 田中 旭昇</p>



落とすや、蛤御門を準備する京都守護職松平容保(会津藩主)の配下にある新撰組は、先頭に赤字に「誠」という字を染め抜いた隊旗を夜風にひらめかして、近藤勇は甲冑、土方歳三以下副長助勤迄は同じく甲冑、隊士は浅黄地の制服で出勤した。一申すまでもなく維新史に名高い「蛤御門の変」の勃発にほかならぬ。

しかし戦況は長州勢に利あらず、来島又兵衛、久坂玄瑞らの大物が相次いで討死。自刃するところとなり、敗残の兵たちは本国さして逃げのびて行った。だが、筑後は久留米水天宮の神官真木和泉(一八一三—一六四)ら十七人の侍は、長州兵同様の敗走をいさぎよしとせず、同月二十一日、天王山に立て籠って抗戦持続の構えに出たのである。

そこで、新撰組をはじめ会津、薩摩の諸隊が残敵の掃討におもむき、ついに彼等を山頂附近で屠腹せしめるに至ったのであった。この時に於ける和泉辞世の和歌が、戦時下の「愛国百人一首」にも採られた。

「大山の峰の岩根に埋にけり 我が年月の大和魂」このように蛤御門の変のエピソードも云うべき天王山の戦闘を、自己の代表作「新撰組始末記」(昭和三年発表)の中に取り上げた「子母沢寛」(一八九二—一九六八)は、股旅、幕末ものを得意とする大衆小説家ではあるが、「始末記」に続く「新撰組遺聞」「新撰組物語」との三部作は、「新撰組もの」

の古典とさえ評価されている。なお、これより四年後の慶応四年(一八六八)四月二十五日、勇は江戸・板橋刑場の露と消え、和泉ら十七士の墓碑は明治維新の後、遙か王城の地をのぞんで終焉の場所に立てられた。

湖風  
年の瀬も水の流れも人の身も  
忘我のうちに琵琶の音をきく  
(十二月十一日京都の演奏会にて)

吉井 良三

遠近は知らず音波のなせる業  
放送の絃執務を止む  
劇場のライト師の影鮮やかに  
訴へるが如く語りは続く  
白髪も禿頭もありて半世紀  
同窓会にて老い見詰め合う

西川旭操リサイタル

十月三十一日(月)十一時姫路市文化センター。休日でもない月末というのに千有余の聴衆が詰めかけ、殆どの曲目に藤間、若柳、徳永、金房、早瀬各派舞踊の立方や笛、鳴物、茶道など組入れた豪華版で盛會裡に終始した。ふるさとの心一竹本旭将外一、絃十四▼曾我

若水桜松リサイタル

十一月三日(休)十時半東京日本橋三越劇場(千円)。定刻既に九分通りの聴客で一時から二時にかけては二階迄満員となり補助椅子を出しても尚後ろに多数が立ち聴きするほどで近來に例を見ない大盛況を呈した。尚尺八田中栄堂外二、琴岡歌惠美の外詩舞劍舞数番が披露されたが特に詩舞「楡山節考」は若水會長の琵琶と吟、佐々木滯才の舞で絶讃を博した。琵琶紅葉狩一歌九、絃六▼須磨の敦盛・新撰組一若水桜松▼安宅の関一宮武旭豊、原田旭柳、原島旭粧、絃押田旭窓。外に詩吟、劍舞、詩舞九十三題。

錦心流一水会全国大会

十一月四日(金)十時—二十時東京銀座ガスホ

ル。本部をはじめ全国四十一支部の老若男女会員五十九人が年一回の大演奏会に荻野宮原両顧問の「偲ぶ盛心」を序奏に独奏合奏四十三曲を披露して盛會を極めた。翌五日は文京区駒込の「花屋」に於て總會、引き続き懇親會が開かれ遠近の絃友同志が乾盃して一水會独得のなごやかな雰囲気ひたつた。

三位研修同志会例会

十一月十三日(日)昼三鷹市公会堂。伴流謡切第七弾法連弾一錦幽、錦道▼竜の口、送別一西村露峯一白虎隊一清水源城▼葉兒一篠宮撥水▼乞食亂六一坂本錦道▼旅人芭蕉一伊集院鼓城▼武蔵野一立野岳朝。以上研修のあと小宴を開き大和田鶴道氏の小唄等の余興で本年最後の催しを終った。次ぎは一月十五日頃。

京都琵琶協会月例茶話会

①十一月十九日(日)一時本部平井春嶺氏宅。三ツ和会演奏會を翌日に控え稽古や事故などで出席率悪く牧南水一桶狭間▼馬場鴨水一別れの盃▼平井一城山、外に伊吹正陽、田中鵬水、梅原旭濤、植村真水各氏。

②十二月三日(出)一時同所。この日天気晴朗なれども寒気厳しく出席率不良、上杉謙信一平井▼禪師と正宗一桜井▼南部坂一山岡▼西郷隆盛一田中▼同▼牧▼別れの盃一馬場の外戸倉、戸田、矢吹、安住、古谷、植村諸氏列席、芸談、雑談に楽しい一刻を過ごして五時散會。

琵琶を楽しむ会

十二月四日(日)昼一時神戸田中敷水氏宅。舟弁慶・宮本武蔵一敷水一井伊大老一楊嶺水▼堅田落・姫百合の塔一石橋旭嶺▼小栗栖▼本能寺一辻旭城▼詩吟一平田東州▼名月綾太郎

ぶし外一曲一川村幸三郎。

三ツ和会演奏会

十一月二十日(日)十一時京都東山安井金比羅會館。三ツ和会は薩摩系春嶺會、筑前旭會派旭濤會、同橋會派三美會の三門下組織の会で第五回の演奏會。老若男女の二十三人が日頃練磨の効果を発表し又三師の模範演奏もあり秋晴れに集った満員の聴衆を満足せしめた。茶白山一青木▼石重丸一渡辺▼月下の陣一樋口▼小菅一田中▼伏見の吹雪一中谷▼伽羅の兜一篠原▼加藤清正一宮田▼堅田落(上)一高田旭章▼同(下)一山崎旭茶▼合奏みどり一伴中姉妹▼城山一平井春嶺▼小栗栖一國友旭香▼粟津の露一清水旭翠▼北の庄一斉藤一井伊大老一桜井旭富▼蓬萊山一平井▼土ぐも一矢吹旭美▼津▼五条橋一岡本旭村▼湖水渡り一細川旭穂▼衣川一西村旭富▼筑後川一坊寺旭清▼安宅一相良旭輝▼大桶公一田中鵬水▼本能寺一梅原旭濤。終演後記念撮影に続いて乾盃、芸談に花を咲かせて散會した。

晴風会秋季演奏会

十一月二十日(日)正午東京中野区北部公会堂。月下の陣一佐藤▼菅公一竹内▼五条橋一中山諸遊▼別れの盃一竹内寿風▼滝口入道一高田登水▼設楽原一関英子▼舟弁慶一本橋錦風福島張水、野口嶮水▼捨子一山崎典水▼湯陽紅一緒方晴舟▼宮本武蔵一杉山雅俊▼敦盛一岩崎竜風、山下晴楓▼城山一會主浅野晴風。外に詩吟三題。

日本芸術琵琶柏会例会

十一月二十日(日)一時東京新宿柏ビル六階。伴流謡切弾法外一錦幽▼彰義隊一青木早水▼山科の別れ一坂入俊風▼赤穂の早打一平田旭

洲楓会演奏会

十一月二十三日(休)夕五時東京上野本牧亭、會長大館美江子女史(千円)。城山一佐藤洲見▼屋島の誓一真泉洲佳▼茨木一中村洲心▼吹雪の敵一彼ノ矢洲友▼錦の御旗一弘沢洲雨▼接待一平井洲誠▼紅葉狩一川本玉水▼舟弁慶(上)一桑名洲聖▼同(下)一荒川洲帆▼新撰組一來賓若水桜松▼常盤の前一岡松岡遊水。

山崎旭萃全国大会

十一月二十七日(日)十時広島中国新聞ホール七階。詩吟二、琵琶十一題の外新人や東西の名手一堂に会し盛大に開催された。桜井の駅一榎野▼茶白山一永栄▼木村重成一上畑▼曾我兄弟一山田▼源実朝一長尾▼若き日の謙信一吉田▼鴨川の露一堀場▼井伊大老一奥村▼筑後川一坊寺▼舟弁慶一島田▼衣川一島田(以上新人)▼桃太郎一西田▼那須与市一菊地旭祐▼菅公一佐藤旭尚▼西郷隆盛一田中旭法▼都落ち一坪内旭鳳▼源実朝一菅旭香▼大桶公一田子旭園▼平の国臣一石河旭豊▼粟津ヶ原一押川旭葉▼別れの盃一大河旭山▼北の庄一木村旭勝▼矢吹旭美津、久徳旭蘭▼丹生谷旭春▼西郷隆盛一友田旭泉▼羅生門一小野旭枝▼曲垣平九郎一江本旭清▼戦艦大和一渡島旭鸞▼安宅一會長山崎旭萃▼茨木一木原旭邦、板谷旭邑、菊地旭蘭。

各派琵琶名流演奏会

十二月七日(水)十一時東京日本橋第一証券ホ